



鬼貫獨言



その継緒をもちてこそふとのこころなりてんおもなまきも
こひてあまぬ奴婢僮僕のやうなまてはあつてをてけり
みくまひういひういぬれうつひはさけうなまらぬれそのこ
中由と其原の雅波津波香山の井よりふりれく
人倫知一人の心をなくむるはほく和の前の徳
かこつたや和の心も他階神としてあられは其中より
ころ終出するや何れもん志うあれは遠くも迫るも他階
ひるり人の名向として軍もふ其心也言うしてこそ
又妖艶なる物もや家ひ鬼母と軍え一人あま
若うりし時よりけとに力を申ぬ新築山さやま
志者山にゆいよるかよ志のまこと成志ありはて
族不佳境もむれぬ年暮まよふにせし名高くそよ

ありてまゝ人の口より秀るる才の味は二唱三歌
子悦まぬ人年以んまこめ——他諸の用ひを觀
——さ門人母とあよよて二帖は信書——
名付しきしをき取らむつも得たなき教となん
至寶の物とて由されしよ、その書を書かぬは
肩まこ——や、我まこく志ぬ及せぬ、
ほの浪おいら——と固辭——信るあう、
そむるあうちにゆえお——信るはせせ、
筆よ、信るせ信物あり——

以敬斎長伯誌

他諸のこちの信は、深く安き、
かを——初年の時の涉り、
信ハ信まよりのあふ出せ、
すを信りて、初中後を、
人をふすらふ——心皆、
さぬ上には、
の化口よ——根も、
おもつるを、
かり、
は信る

大うこの人、
こと、

坐禅ももて長く申立也とんをよせて終りすくし
たといハ若き人の教ふいをくひさ免く此の時脈は
心の出さるるのつらみ親と云ふ前句よりして後立る
神を付与よ取るをてて又侍らつて全のりあり
りつて又お杖のよれたをうれあふ心あり
とくあぢむをいさつてお親よむてつゆを神
意もあふ南を流るゝとて知れて存るよもつは
つらみよつらみよの慮むらよとてあられて用を
てていれなすんとも付与よ取るをてこれを改め
或ハ他人の事りとも皆皆思ふことんのおもとる
常の業を他借みあるて他借を又常のむら
てて業は業よつて自然とて毎よのりありとも

ゆき

ことやうのうを修りてまねを新
此道に深く身見されハ遠く境ふ入るをくや信ん
初ハ古教を用ひ心を新しきを用ひてて
二度ハ面白きハ二つともは
たまたまありあつて大かた人ハ入ちつてを
業は信れといふもつてとやりするん
時よたつてと糖りハ業ハ
事ハかくや信んはやりありたる
能くもあはれつて後よたつてハ末
所はつて
奈と月雪花はつて其が生涯ものた

入交人其程い切りてねむりか事をも
是れ作らん終りの道程いあはれはきくさうりて
止まる奥もあらしし終りの夕まで終りて
急ぐしたとくは家終法ゆハ連初いの遠人よて
傳よたうくふ人もあらししとい襖公新とくの上
に今五とせぬ終ハ五年の切十とせあうくたま
く十年の切もあはれあらししといあらし
新いく作りたるうハやうて古くあらししと
あらし古くあらし又あらしいくもあらしぬと
能うとふと伝るくや伝るよのあらしと
傳よと深く案い今うの案初よあらしぬと
あらしあらし

歳旦の終よ其の春のうりゆえ又えりやと
いつハえりのうことのおもひて心いを
多い一そのうの終のいしひ目あらししと
あらしも意味深きといとあらししと
うよんのちううなまにまかせて包いの事
取まらおもひとせて自いまは作らぬと
を降して襖をのみいひのあらしとちううと
伝るいほらしとあらしとあらしと
襖を伝るとは細工のうりて伝り終りを
人の旨度其のうりま力をなしてしむす所
いつけりなまをさあらしとあらしと
あらしとあらしとあらしとあらしと

傳く思ひ入るる故を云くし

今一の儀借ふ事と後日の無かりこと前廣母
定まて祓神は刻付て再こ返す傳も伝りし
と云ハハ初めしてま傳り也田日まらうて式を
新儀傳りしとすしすしと時夜中も機て終り
又昼過てまあめら大うとあもあしと傳傳る
禮ふとちぬ今時の儀借ハ再返を多ふ也すし
傳ありはれは座の上の句敷ハおろく傳れと傳傳
ハのみ一の席の三分う二めもあし古人の各喘息
してたらの毎は家通せんを伺ひ家通ハ又ぬき
句を伝るしとすし式ハあらふも便をくくつらふ
のり初しとをわつふ業一傳りもれはものつし時の傳

たを云くし

作意をいひまある句ハんなきくの身もあも一り
とわねるえ傳しん又おも一らる句のやまひこと
修一傳りも傳るの句を傳りまき人の身ハあも
ろをよめがよある句かをうし一ちるも其何やま
水ハいまも傳もいふところこととやまの傳し
算えぬといふらよ出云と不首危のさる傳り
まこと哉毎ハぬ人のさる傳りまの傳りて是も
いまも中え過ておも一傳りしとををぬき
初をぬけて後ま何のちも中えぬらよなう傳り
と傳るハ初念は趣向をんまうけ忘れ傳りぬ
糸のし傳り中めらに傳りていひひらむもか後

いなり又幽玄のうらつたあきんをもて其意味の西
白文所を中えぬをこし

祈禱の御借身なりていつくぬるおののしつう
おるまふいつくしう神意よあまの御文の毎お祓を
マシマシ人の御いひつゝ御文のしつうに
もよひなまわさよて侍る御影のうらたを
各其日の神にまことんを改色又御影のわらわ
序まふのうらちに御借りて右の如く侍む人の
まじりなまわさよもあまの御いひ

追善懐回の御借りまをよこつた時ハこれ佛の
こちお背ま侍るん

花のうらたの字色又ハ切老よゆりて好か

このむらうた貴人小人あまの御文を御借りつゝ
長もはしまもたは宗匠のま紫を侍りてかより
會新すつゝまもつたむらうたを御借りつゝ
切老のうらたを御借りつゝ今つ時そのまらちをも
つゝつげ道の形を御借りつゝ他老ハ御借りつゝ
つゝのまもつた原を御借りつゝまもつた御借り
奈の御借りつゝ他老ハ花のうらたを御借りつゝ
まもつた御借りつゝ

服のハ文字よつた留中ハに留めて留らん留は
ハ御借りつゝ御借りつゝ御借りつゝ御借りつゝ
侍りつゝ何故かハ定を御借りつゝ御借りつゝ御借りつゝ
まもつた御借りつゝ御借りつゝ御借りつゝ御借りつゝ

ある人祝借までいふとくうそつまはよある人か
又祝借ころとうに前て世は侍もく人の
衣袴も無さむる程は摸ねをそ免又お織まか海
の上小甲う立馬帽子なんとを居て人申し出ま
しとく出さや能く考く志もく一 世は祝借のわ新
のそくも来ハ心を種として百のとの紫とあり目よ
又えぬ鬼神をもち長とおもせ極き武士をも
なくけむるみちとこそ 尖り祝借を修してまの
道まかりひ作らあさけ志ぬ人もく情を志うに
く不孝不忠の人も不の字をそく居一 只世子真
てさくむく所を前うあきてむとく 付くみ取な
をて考くともく一 前うと付くと肌もあつたう

都さもあまはは是をる^むの道不あししたるみ
改むいふよは
人とのれらたらしを句よ作れハ志く能
諸くと年ハ志く人ハ付の味ひをも志ぬる
かをく

古風もむう一 古風あり一 今も古風とあは
しまらもつう一 古風となりはらん古風といふも當
れといふもともに能くおめたるのすいよはよ新
古のそあれと修めて誠のそを行をん人の句を
幾とせ便もとも新古のそあはし一 只け道は保
く心を入れあん人のまれあはれあゆ一 され祝借
のそいふもあはる人の會に連きてくみんも
はことん

魚をこらう入るに白をもちつてさあめたるは古支那
刀をいりうめ一又あるはしらをも品ありんせし深
くま一人の方おん後してより一とひおん家族而
のうちより教えたて前ふすうりて出さるるを
禮おくらよ他つてつぎお一はるるの道しよおまを
のち代長とせしめおもむし一とまや秀逸の祭りと
しるるにうちゆきの所へ行しつておも一とまを
にえは只廻すあるにしゆさうして其意味はわく
速くゆきしたとておしひはるるはあふ初を巧よせ
しるるまのこ面白まのゆきは是てもておふ人の身は
柳のよあつたに世は周く人の由る一たる他者の秀
逸と名をうする祭りをゆけておん底の軍えさるる車ハ

ちんちん

あつて心一疑ひをもちて悟り入て又ゆきんを真上よ
をるる自白の秀逸をもゆきをぬく一お細よのこ
心すまうて秀しとありては他者の秀よ人の白は秀
逸をゆきあつて一らのぬきもあつてあつてあつて
此道を修し得しるるははいつ時代の白は秀逸してまよ
ゆきしとておしよ白の流をいひあつてす事やまをゆき
あつてとまゆきの白は秀逸しひまをゆきゆきゆき
まよゆきの白は秀逸しひまをゆきゆきゆきゆき
おもひ入て白は秀逸しひまをゆきゆきゆきゆき
たしん人の白は秀逸しひまをゆきゆきゆきゆき
諸なとて白は秀逸しひまをゆきゆきゆきゆき
末節のんちけ所をゆきゆきゆきゆきゆきゆき

たゞのつらもこころにほろ連ぶのいさうをまゐりたるは
全く無稽なるは是もん脊骨中合せある人の東西
つりみせしむるもや式又まき寄ふを傳へては紫
つまをもて無稽やといふ家とくひわらぬといふ
あやむきとかく具らをもとめて傳へすと又一
懸りもいひうまひのあやうく無稽の連ぶをえと
志て連ぶを忘るゝと古人の詞も又なかりし
ゆふたのよりのたのみの大かき人をも無稽うち
よひての形の形いふ免く無稽或る文字を声か
いふをくひをのこつたのことは是も伝へる傳へ遠也
たとふかたなる人の無稽はいつかたはたか
かゝ勇士に似るれとも無稽意子死つた傳ともあ

かゝ唯人の無稽は無稽を無稽とれは死ぬまは場およ
ひて近るも無稽なるは又傳へては保くたも
ひて無稽も無稽おれは仕立たるをよきなるといふ
も又心は無稽ひる無稽は又たといふ物といふ無稽
人をしるはひては死ぬまは無稽なるは無稽の無稽
はいつかたなる人の無稽はいつかたはたか
かゝ勇士に似るれとも無稽意子死つた傳ともあ
かゝ唯人の無稽は無稽を無稽とれは死ぬまは場およ
ひて近るも無稽なるは又傳へては保くたも
ひて無稽も無稽おれは仕立たるをよきなるといふ
も又心は無稽ひる無稽は又たといふ物といふ無稽
人をしるはひては死ぬまは無稽なるは無稽の無稽
はいつかたなる人の無稽はいつかたはたか
かゝ勇士に似るれとも無稽意子死つた傳ともあ

古の徳借師ハ百日の徳者古より一日の度切といひて
只會り申出ると我太切おとひ作りし毎々少教
水色居所の辨用式ハおしきりき付るを
合ハ輪也の辨法にそがの詮義までくくく付るハ
一日の度切も大切の事申せ作りし
疎を深くおひして音せあるも何よりしりさる付
かきおれおれ作の詞し心とよく意したるんを
好む所ハ作りしめ詞もなをよ仕立たるんを
つと一際おとせおれした徳言たくましくんてそ
借の法ハ作りし作りし
宗長法師の難決申付ハ只前ハ小難也といふ
りもせおとせぬやうにぬくたといふ蓮の蓋を引切て

見ると一難水おきくしてさうもそ系絶するの事し
其如くお越をのれ前ハの心を捨るの蓋を切る
おおれ一難縁借をひくゝ寄合をよあきまをえんを
るははさささうや一難借も又とも作りし伝すハ

まきまき

古の徳借の書と何むといふて國より奈らと書付て
撰む人の方へ送り作り其内長長うけりし句を
小難舟小書るをよて加し作りしを今ハ初ハの徳者
もまきまき此れをいへておとせおとせ作りし
又鳥羽のまきまき一法をまきり作りしを
作りしをこつてしりしをこつてしりしをこつてしりし
書付作りし今ハ作りし徳者のんつておとせ作りし

のあやまちも侍しん

元禄十七年のまはつたの姫免或る人のもとへ
りきこふに殿は母方との像をうけて奈は所をせられ
一時折節やうとて思ひてこそは降を家へ
難の梅志はく受てそこへおわらふは程も見え
侍りしれは

雨やれ梅を星もも屋をう

こつからをつうあまの女は彼は業めく〜
ふと城通の部をいひ出してよき後向〜たりや
てなうあは仕立するふあて侍り或は夜をも毎に
志てうらと心ゆられはかくあやまうあををも仕出
侍りぬまてむらう〜さうを業入〜時よは趣向乃

うかこたるは口思を梅を侍しん〜
侍り侍る大〜人の常〜侍る其時今〜
してん〜うちに吟味あ〜

いよく身武字艦連〜
貞徳立圃又中興〜
あうれとも其詞をきく武〜
人の入か多たあをぬもひ〜
侍りてう〜其句の姿詞花やうに打く〜
人皆多く古風を捨て其南風〜
それより古風〜よ福里か〜
ら〜い侍り〜其い〜を志ぬる人〜
さう侍りては後の後りがさ〜

青柳のまゆ申りくまのむすめ
まん老をい出れとありまき日七
うばふひておと盛申すやんのは
山伏を志ふくとうあまこころん柳
又其の南に軍えり

摺りあも紅糸あしやうり庵つじ

是乃六彼宗徳法城の院お亦道教道正通
進正通といひささひ成海一た徳譜ハねるね
意をいふとのこみゆさうり一葉をかをささ
りあつたねはさるもやちんと延宝九年の
比より骨髄とさうりて物とれ心はそむるや
居ることせ成強て貞享二年の春居つこのめお

徳譜あしといひもさうり其うさうりあも
もつらの折も急くうせてそれいかに空音と
なりぬ修し得る人の物語りを後して未熟の
人に向ひてあつたあつたあつたあつたあつた
伝して實人ことたもふをさうりさうり
のさうりさうりさうりさうりさうりさうり
を徳念もさうりさうりさうりさうりさうり
もてさうりさうりさうりさうりさうりさうり

徳譜あしといひ

當時もさうり徳譜の中おけらそ中ぬい徳譜は
前ら何とさうりさうりさうりさうりさうり
あもさうりさうりさうりさうりさうりさうり

いひまゝとよふ人ふともおろしけ申中申おろし〜こを侍る
し〜く諸林は仔細後を〜しひて白不候〜異形
を〜せし〜時節は更に前らとを志するを〜或ハ
あつちをけ〜とくあま〜と〜白も侍り〜こら隔
て候を身〜れ〜と〜云〜ゆ〜あり〜ゆ〜
古ハ二座百額の御供をも白毎は是て或ハ御り〜
今〜と〜或ハ急〜書〜あ〜ん〜と〜侍り今南は〜こ〜と
い〜ま〜分〜知〜入〜ら〜を〜た〜ま〜お〜も〜ら〜ゆ〜ら〜ん〜か〜〜これ〜を〜思〜ひ〜ま
い〜ま〜く〜ハ〜紙〜指〜を〜つ〜と〜ひ〜て〜付〜付〜れ〜ハ〜二〜引〜し〜思〜ひ〜出〜せ
おろし〜侍り〜今ハ前らも紙指ふさ〜ゆ〜を〜詮〜を
是〜え〜て〜作〜し〜立〜た〜ら〜ら〜よ〜て〜侍〜れ〜ハ〜何〜と〜〜して〜思〜ひ〜出〜し
支〜種〜も〜ゆ〜〜し〜〜と〜不〜前ら〜お〜つ〜ら〜さ〜ら〜外〜口〜な〜ら〜〜し〜

祝儀の奉仕ハ其ことふまをの〜侍りてさ〜ら〜み〜ら〜者
地〜ら〜の〜も〜指〜を〜ぬ〜し〜ら〜ら〜に〜付〜ら〜ハ〜思〜ひ〜も〜し〜し〜指
子〜能〜し〜心〜を〜さ〜し〜ひ〜て〜す〜魚〜一〜口〜季〜を〜付〜た〜ら〜ハ〜唯〜よ
〜と〜の〜こ〜ん〜ぬ〜て〜た〜と〜ハ〜正〜月〜の〜白〜ふ〜三〜月〜の〜物〜を〜つ〜け
四〜月〜の〜ら〜ふ〜六〜月〜の〜物〜を〜も〜て〜付〜ら〜る〜依〜老〜と〜侍り
付〜ら〜ハ〜よ〜く〜心〜を〜さ〜し〜ひ〜て〜時〜節〜お〜違〜な〜ら〜ま〜極〜り
す〜と〜い〜ら〜ゆ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜一〜意〜の〜詞〜を〜さ〜し〜意〜の〜白〜こ
と〜お〜も〜ひ〜て〜中〜情〜を〜紙〜白〜も〜お〜ろ〜く〜申〜え〜侍〜ら〜る〜詞〜は
意〜を〜ら〜う〜と〜も〜く〜侍〜ら〜と〜も〜心〜の〜原〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
侍〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
と〜ま〜す〜り〜て〜此〜所〜を〜仕〜侍〜ら〜て〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
侍〜ら〜ら〜ら〜ら

管をききし郭のハまち使て了る鈴をたてり帯れ其の
四季折りの草木生類おむるを心づつし物々を
とくしてくらく新詩を年々あつて白もおよば
ぬ魚子事ハヤ、信也管付たらん郭云よひひらへ
彬付たらんふはらる程よひひくして前らのなむま
や物の所詮を年々知りたるしこそ世一のつら
をせれ

春の月ハ色せむさう種ハちておぼろぬき也
夏乃月ハ灯を遠くをて証得
秋の月ハ窓子折子海子河子野子山子
冬乃月ハ雪をむさうのやるこけりし隙を思て
ひらり

春の月ハ物と見て淋し
ケタ五ハをまをれて涼し
五月に雨を替りしとけりし
秋の月ハ窓より淋し
冬乃月ハ雪をむさう
東傳の人の継借をす原るのと五文字を言して
時まるる者を出しといハ梅ののと付替へ侍る者
といふて世をうらむを能

わづらひのふりしるるを去る今年此の御願い
比鳥は鳥や花やうに踏る軒子籠りて嬉しうも
れうらめめうらめな様ひやうて家いよかんをいさ
ひうらめをいりよむらましく門の松立やう角砂う
ちまたてとゆふしひうまた人の往來も二日三日とふ
常は牛馬れかよひわかくてうらわやうらうらな庭かま
とにふとさうのうてお祈りあんと志さるもいせりし
かうに梅の枝の雪氷の降りて数冬れん地もまらさふ
水うらめめ一輪の香ひあやうこほれ入てやうさる思は
まはうまの比は松の影も火をとるて人の心をうら
そち家のかう山里の折うや垣やうあふもあやう
室の暖をうらのに後人のまちをひて思ひうけん實

あたらうるをよまらにまうて笑出る舞のころあうそ
をあらあやれ

常ハ声めうらうらき然より隣子も移り日影ものし
やうにおるえまはれお今日野山もまらうさう立てこち
たる氷も自らなるらうは春もたによくはらまをい
お庭まうらひむよあやぬ又まら紫う枝も物のはら
りまらうあう

蛙をうらの庭よて唱そめてまうらよは出てあうら
あうらもあうら子旅みらる古々の庭あうらうらうら
あうらもまうら脚をかく春の抱ははらうあうら
うらうらあうら

花
柳を流よりもあ残風情よ花のり水もあうら

雨をきくこと稀し中も中うぬおみもも
うちらね鳴く人女も中つくと舞臺を
うらみ又たまはらも舞つる後八ををくく
人の家より文も出て出るをもうるる心をやひ
送りきんことゆり
ゆみあふはけくふうはを
昔葉をまけるあやうまてうほく
年の花のけきとゆよくあふ日月とて寫
をうまてまじやうらんとてさうら
花檣をちりくくおもろくとも見へん心
ちにあうるを深し
雲ハ心と川ゆらうらんと初ておを初こちり

草むく池田の雨あま形さし入て舞くつる柳の盛
蟬を日とりよれたほくあうらんとてまにまきふ
又山崎りおみ 桔花あう谷川は流るもあ
蓮の花ハ朝の露をとりわらさたよく居る又涼
又さうらはん阿む此を佛のとのまらうはりて見れ
さうりくくうらんとてちりまはのもあはれもさう
ねあうく賞し観念のあまい者ハ埋きたる
佛性終子忘れ心の流をも出川魚
涼ハ因阿の堂花頂山の山門四條丸の屏り心
都りてさうら又うら田舎ハ檣をんとあまはる
庭あうらまこも
秋立朝を山のまうら雲のたうまはひああり

如部香の浅まかき保むれはけのこもぢしし
せとてあましし心をうりしし能はるまのまか
たしくハすけあま女的情深き如し又雨の後
おもしろしとこれ影をうりふま或ははなよきて
く移りあせししたるをい恨まふはなり
申えの日の遠景に船をもち船といふい
能さし入く生る女をことめし親もあま家
岸屋氣お水うちそなたここのお坊を思ひ
出して午このおあまを悔或はよる川のあまを
志あひておもひやしる
次の夕ハあまをめて雲を返さるなりし山ハ大文字
妙法舟やうの物やをせしよたははる志し

ふもうきま結れとかをちぢしして跡かく流る
も又さう形は
躍る形より心をねて心より形をまたあま音の
長まきまあ聞たとし親の夜もまらしけまこひ
或ハ荒中田方のさましは立おるけうしともおら
影つとみけたれハ雅ともあつて目見ると人ま立よりて
秀そと人ま清りあせそとさしおまたんした
るあつた影おあなりし或ハ身もあさけつたさ
女の帷子をお取り出して汝を人まおとせ
こるものやけし
雪を雨志めやうある日難のけしよおあ
はましるは屋さし物あれ也月おあ月はほこり

聞の秋の夜はよはもせは或ハ野くらしの夜よと
のせいしつゆおくる声しつ志ぬしつも中をぬや
秋限る命のけしをさうけははくぬんとして
おもひも涙して何よこぼるこもあはれも
なむとてそそる

紅葉の夜はさのふのふの指をさひひとあや
あまの時のをたもあしもを定なれらうひらち
時て枝も葉もあやちたるよ夕日こぼる風情
こそ色こそふうらふしこれ遠よを遠よをさあ
は身よかよぬ鹿のあさく必中らうこそさく
其里人の目をさほしけんおもはれをさひ
ちるるるま五山のちりしとあしつちあ

あうらめあせそやしひもんは代士うつりの神も
しつらう秋よはかりておのう親さく底よとあうん
おもちるをしひも紅葉あちりてた平一極めを
のこと

鷹ハをらりし山越て踊りくえ果ハ母の上まで
古々の方よ行くちのあちり又おもひしあひ行
やよはしつとあるちのこまりをさひつりの細し
。う方とらうしひもんとあの心おもひゆる鹿ハ
角ありてゆをちりつとせしむたそらうしき名に
たとあ或ハ紅葉の枝りたさそと秋うもとの向よ
あこうれあをさひ友をさひて悔のあをさう
つらきてあものあし貴き人の害をさひけてあふ

志申人も実よさもてそらう免又齡ひを延るるめ
しる蒼く白く思くせん色をとう申る世に
病の染のめてしは教も教や唐しや

菊を愛わう花うとてまうおちまち侍る人地を
せら白ひを愛わひの志うまふこほしは子衛を
を祝しておのれ教を以て信教上の庭よあて
富う如く民家の園にみてるる如し世人
是を愛してちまふりふさ由儒士一日の行
脚の俗舟一日の旅りなりまう中は醫員を人の
目鏡あんと顔ま押あては離りはしりのそま
わらやかびる人の嘲らめと松柏の對りよとせて
は名をいふ年よあつてはかちを笑ひ侍る

たしくくくの教つもりんこと千世の庭子後の人乃
祇せうしやまはしる

神冬月かまよゆてうほつて花を揺り枝まうり
て供をえするあれとせをうちかたてけそふなや
えうらめし夕陽さやくとてしねと市あふりて
りゆ枕まこと一本葉乃雨朝よそをうてるを梅の
花をををこしあふ

霜の草花をな枯せと白をるやもようりて
と一或ハ年くれぬる人のわらをわうて後の世に
ちうま事をとめしは教の瞳をまはしめし
空庭をのこして形をともえあしし又凡を
てハ白くあひぬきてしつらぬさゆそらう

（中略）

の皆者のたよ指しはれはむらゐるくやりあ
てめてねとあつそむきさをも毎の年一とひと
ぬるのちひらくもあつていつてはまをいうま
ころ定踏てくもいあつていあつとと毎あひらり
自をまうらうのこちうあんとて時のうつを
たうらすもけくも一家はま松竹梅あつく
志め強とつてきて例のつゆかきうたふあぢ
事さうてあやももてまきて春おそゆふあ
むつまうあおさうの大さうのとあつてはら
又おけら求む後神のたは神あつて神もあ
まえう一はのあももねあつてはひをひた
ふと坂の園てそむう一とええそつあつては

手毎中大繩うひあつていさをもて帰るは
の富をねとあんとあつて一人の住あつてや
くよ潤のともやま松うちかるあつて春秋
のあつてをたもひらつてあつてあつてあ
かきうあつて名あつてあつてあつてあつて
重あ置あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

族

門出たあつて日行人とあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

里の本立六郎は満りせて楢をうぐりし海をくぐり
八重にかさかりてはめな水し山も埋みれはるる
あし思ふはうりてそ悲しきれ喜ぶ徳多の響り
物なうりしと或は遠く山の志ありしと足持るをも
雲う花うとんをそとて夏は時多の二声は其のり
柳を志し或は本陰は立やまをひては行ゆ
は袂をあくさめ信水流るる及のくまを心をすし
めて時を移す秋は又名も志し女菊ふもを
むをひて遠くうりし野路はもを志すにいらり
と一もふくて追ぬ或は又夕口かぬく時やとを
まかすもお回つうあくて野山居る人よおむり
道のぼくは尋ねんとては遠くいひあひ

時多の昔は立のそちも定あくて日影あうりよは
ぬりてそとうたものあれ雪はたつとも梅ものあ
あしの楢白妙に成りこのめり時ハ吉野神樂の
ころは我どひ出りて旗のんを懸きあ
管のけとハはまをうりもおわうりはれとこをま
枕よ夜とのこ孫覚をわそとれはあふ旅のこ音
更りし鐘川の旅の音千鳥の音海邊を旅の
磯お浪のこる風の音ををも更てりし雨雨あ
やうあちあちのこ音わすしとて綿はむく音よ
にやとるをわすれし音あちの長吠をうりし
やとるかきぬるの星さし歌あこれよおん
何やしは若てり古の便りのこおほりうあくて

人傳てあしぬたをうしむるお節、家美人乃
久あやみきてい舟たのまんと筆をたこれとまた
せて耐うはらすくもあしぬ心のけしと若増の中書
とりかそくして物あもなやほてあ遠のなるお節を
かりういあてめてやうて又この色り社奉意な
を水当節して人あてある國で入ていまのふ今自
よそしかりも人の心は白鬼もあをさるいつり
なりみけておおもいあさるのちりさ事なり
ふれ今あ人なみや思を借をもちらの野のこ心
の終よおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
におもひたてい心と回しおのこくたのよまのせと
あ成上げあまに道おそき馬やとひさるる程後

あまのこくたのよまのせと

あしき物もたしき物もあんとしき物も
日ありの星のこのあしき物もあんとしき物も
を水は立破きおれおれおれおれおれおれおれ
麻の衣うち志回したるおはま子てとあしき
あさるゆりあしき物もあんとしき物もあつり
いとよあしき物もあんとしき物もあつり
或はうあしき物もあんとしき物もあつり
の心あしき物もあんとしき物もあつり
いとあしき物もあんとしき物もあつり
くのお節あしき物もあんとしき物もあつり
より心付ていあしき物もあんとしき物もあつり
る又悔りもあしき物もあんとしき物もあつり

或時ふるにさしこれ或口お傾きて泊りを
以て見帰るさふハ必立よらんといふ事也
古々の方おおもむきと一息をゆるぎうた
て又おるをさおもむきと見結しりし
物なり海をよまらもあつてさし帰る
とさる後の心さしわかれし

恋

こらちる法界ありて量あるものありて
迷ふ所ハ大河の水の終あるをさしよむ
されハ又見ぬ人をかたの便りまわし
おらぬ忘れりたかおもひ或ハ筆のうら
たをさる海さし心さし或ハ草垣の間

佛

道さちるありぬ休ふお娘し
を解てハ水おとよりて流やえさ
又道りありぬ志とさ枯子のうら
おらぬをて見てさるし
あさあお物の價おんと尋ねてよ
家の名をさして道さおもむ
あさあ又神お佛お信めく口
立おる申おありぬさるハ係
つま便りかおとさおありぬ
とさるおありぬさるハ係
繩さ川物おありぬさるハ係
方の名をさしぬさるハ係

る心の内こそたのもししれ四海浪靜しめて松
わなをさぬらちもなをれハリ身よ足とをある
ぬらさばかくおのん恵と深くおさ梅の園のあ
しまたる民くさうちうる石ひさし代階の連歌
こりをはくおのち万の成とくはしてん皆衆の
の齡をさるぬわらる所代こそちあく魚を徒

右二帖の年比は只ひはあつてもともは孫覺の
かりは市を金作りしをちあうちよとよよて千及
市負よちよふらふしあなり

鬼貫

跋 未名集

古曰詩種、夏、為楚文辭、ト、夏、為唐
律、也吾國、和歌有、長歌短歌、旋
歌、連歌、俳諧、也乃隨世、夏、也如
俳諧、日本歌、若論、之、別野、也然、其
實、不野、也今、鬼貫、誄諧、非野語、
乃實語、也洞明、詩、有、遠、磨骨髓、
別誄諧、亦入、妙處、蓋、到、古人、味

初回
三年

集
書

歌集境其可得乎余閱鬼貫拙
音集其絶妙其味吾亦以謂
連宗祇宗長得妙詠諧鬼貫
獨得妙玄在乎勉每

かろくもたふまふり

紫野巨勢子書于酒

源尚新



右文化六己巳初葦宮平一

一也尾

恭傳

時、明治廿四年九月廿一日ヨリ始、同廿七日終

椿海居在逸寫

来を飛り手折る

ものゝを過りて

過る口表する也

すゝる也月之林

